

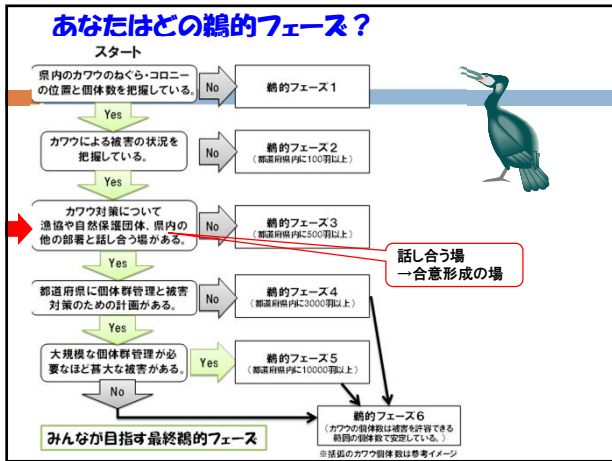
グループワークの進行について




長岡技術科学大学
工学研究科生物機能工学専攻
准教授 山本 麻希
umiushi@vos.nagaokaut.ac.jp

まずは鶺鴒的フェーズ診断をする

- フェーズ1
→ ねぐら・コロニーの発見、生息数調査
- フェーズ2
→ 被害量算定(飛来数調査、胃内容物分析)
- フェーズ3
→ 合意形成会議(カワウ対策の課題解決を実施)



とにかく一方的
とにかく自己主張



これしかないよ
これしか!

わかるけど
でもね...

だいたい
よく考えてみた
のかね。

とにかく上から

いままで通りで
何が悪い?

とにかく保守的

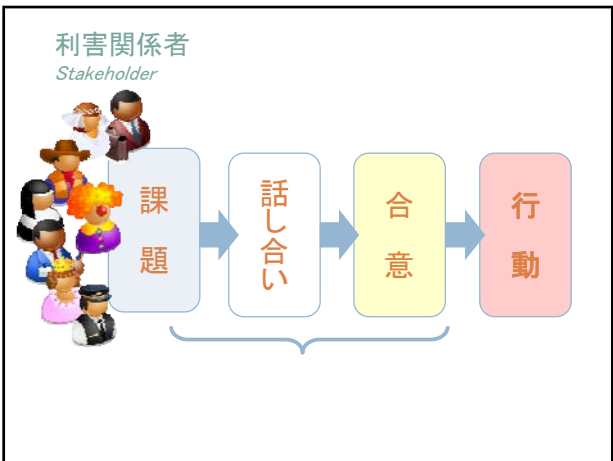
そんなの
上手くいくはず
ないわ。


とにかく否定的


合意形成

多様な関係者が
話し合いなどを通じて
各々の利害を顕在化させ
意見の一致を図る過程

利害関係者 (ステークホルダー)



Too Bad  皆が無関心(あきらめ)で
 深刻な対立が残る

Very Good  当事者意識をもって
 結果に納得して
 前向きに行動できる

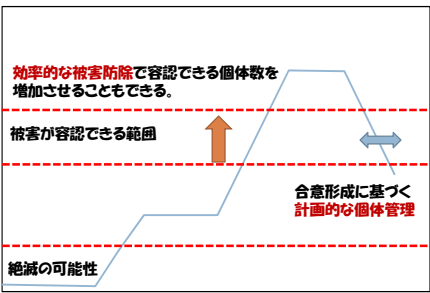
交渉の最終目標

相互利益
Win-Win

↓

良好な人間関係の構築

個体数管理と被害対策に向けた合意形成への道



カワウの個体数

効率的な被害防除で容認できる個体数を増加させることもできる。

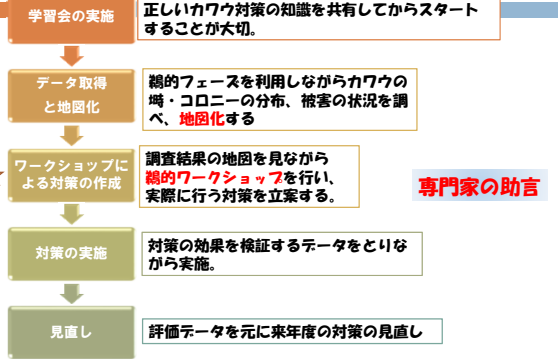
被害が容認できる範囲

合意形成に基づく計画的な個体管理

絶滅の可能性

個体数を減少させるのが目標ではなく、被害を減少させるのが目標

カワウ管理へのストリーム



学習会の実施 正しいカワウ対策の知識を共有してからスタートすることが大切。

データ取得と地図化 鵜のフェースを利用しながらカワウの増・コロニーの分布、被害の状況を調べ、**地図化**する


★ ワークショップによる対策の作成 調査結果の地図を見ながら**鵜的ワークショップ**を行い、**実際に行う対策を立案**する。 **専門家の助言**

対策の実施 対策の効果を検証するデータをとりながら実施。

見直し 評価データを元に来年度の対策の見直し

鵜的ワークショップに必要なもの

- 各グループに1つの机
- A2~A1サイズに印刷された地図
- カワウの増・コロニーと漁業被害の情報
- 油性ペン(カラフルなもの)
- 付箋
- **熱い情熱!**
- **美味しい珈琲♪**



鵜的ワークショップは単なる会議じゃない!

社会学的な知見に則り、行われる合意形成のための会議

- ➡ □ **基本ルール**
- アイズブレイク
- 役割分担きめ
- 書記(模造紙へのまとめの記録をする)
- 発表者(グループの進行役を兼ねる)
 - ファシリテーター
 - タイムキーパー

3つの基本ルール

- A. 意見の違いを認め、否定的な発言をしない(すべてのアイデアは有効)
- B. 権威や多数意見にひきずられない(組織的、個人的な関係は無視)
- C. アイデアは質より量(全員参加)

鵜的ワークショップは単なる会議じゃない!

社会学的な知見に則り、行われる合意形成のための会議

- 基本ルール
- ▶ □ アイスブレイク
- 役割分担きめ
 - 書記(模造紙へのまとめの記録をする)
 - 発表者(グループの進行役を兼ねる)
→ファシリテーター
 - タイムキーパー

アイスブレイクの効用

- 議論が活発になる
- 話をしやすくなる
- 突拍子もないアイデアが出る

⇐ 話をする“雰囲気”をつくることが重要



鵜的ワークショップは単なる会議じゃない!

社会学的な知見に則り、行われる合意形成のための会議

- 基本ルール
- アイスブレイク
- ▶ □ 役割分担きめ
 - 書記(模造紙へのまとめの記録をする)
 - 発表者(グループの進行役を兼ねる)
→ファシリテーター
 - タイムキーパー

鵜的ワークショップの進め方

- 課題の設定
 - 取り組むべき課題を設定する
- 役割の決定
 - リーダーと記録係とタイムキーパーを決定する
- 発散思考:ブレインストーミング
 - 自由奔放に、アイデア、意見を出し合う
- 収束思考
 - 記録をもとに分類、補足する
- 評価
 - 実現可能性や重要性、効果性などの観点から出されたアイデアを評価する。

鵜的WS STEP 1 地図作り

- カワウ地図の作成
 - 春～夏、秋～冬2枚の地図を用意する。
 - それぞれの季節ごとにカワウのねぐら・コロニーの場所におおよその個体数がわかるように地図に記載する。
 - ねぐら・コロニーから10～20kmの円を描く。
 - それぞれの地図に被害のある漁協の管内、被害のある魚種を記載する。



平成27年度5月兵庫県カワウ生息個体数および飛来数マップ
(兵庫県内水面流通とりまとめ)

兵庫県のデータ紹介



- 朝 →
- 夕方 ←
- ※大きい矢印は10羽以上の群れをさす

- ねぐら・コロニー調査の結果
- 飛来数調査の結果 → 同じ地図に記す！

どこのねぐら・コロニーを管理すべき？
新規ねぐら・コロニーの発見！

課題だし(ポストイットの活用)

- 課題をできるだけたくさん出す。
- 話が苦手な人でも参加できる
- 記録保存が楽になる
- 議論の整理が楽になる




ブレストにおける4つの掟

- 判断・結論を出さない(結論厳禁)
- 粗野な考えを歓迎する(自由奔放)
- 量を重視する(質より量)
- アイディアを結合し発展させる(結合改善)

KJ法(収束の過程)

- 文化人類学者・川喜田二郎(東工大名誉教授)がデータをまとめるために考案した手法

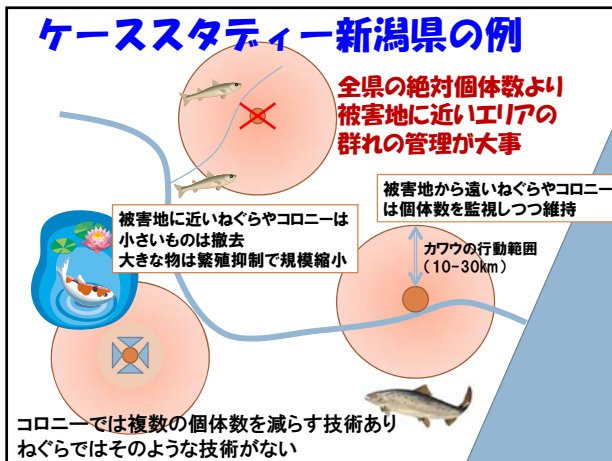
こんな感じにまとめていく



課題 生息地状況・被害状況	対策 計画づくりの推進に必要なこと
被害対策	地域の課題を解決する(カワウ編)

鵜的WS STEP2 生息・被害状況の課題を見つける

- 課題の洗い出し
 - 地図を見ながら、生息被害の状況についての課題をブレストで付箋にすべて書き出す。
- 洗い出し終了後、KJ法でみんなでまとめていく。
- ポイント！
 - ここではあくまでも課題を洗い出す。対策は考えない。




- ### 鵜的WS STEP3 対策づくり
- 課題を解決する対策をプレストで付箋にすべて書き出す。
 - ○○のデータが足りない!
 - ○○の対策がうまくいってないので、先進地事例を学ぶ
 - ○○の対策費を特措法を活用して、組合員交代で実施する。
 - もれなく、ダブリなくのために!
 - 情報、お金、人、体制の4つの観点から対策を考えていく!
 - 洗い出し終了後、KJ法でみんなでまとめていく。
 - ポイント!
 - ここでは様々な対策のアイデアを考え、まとめの際、良い案を絞っていく。
 - **あとで、対策がうまくいったかどうか検証するためのデータを一緒に取ることを忘れずに!**

さあ! みなさん! WSの時間です。

グループワーク

今日は1つのグループで各課題について
みなさんで考えていきましょう!

カワウとの共存を
目指して今できること
を考えて下さいね。



グループワークの進行について

長岡技術科学大学 工学研究科 生物機能工学専攻 准教授

山本 麻希

鵜的フェーズ3に到達する、あるいは、県内のねぐら・コロニーの位置がわかり、漁協の管轄を超えて広域で個体群管理を実施していく段階となるとカワウ問題にかかわる様々な立場の人たちが話し合う場を持ち、カワウ対策を進めていくことが大切である。カワウはブラックバスと違い、日本の河川生態系の在来種であるため、その生存は生物多様性の観点からも保障されねばならない。一方で、カワウによる漁業被害が深刻なあまり、漁協の経営ができないというのも困ってしまう。そこで、私たちは、カワウが絶滅はしないけれど、彼らによる被害が容認できる程度に個体群を管理していく必要がある。

カワウの問題については、それぞれの人々の立場で管理に関する意見も大きく異なる。そこで鵜的フェーズ3では、このように意見の異なる利害関係者の合意形成を行い、カワウ問題を解決するため、実際に行動を起こしていく必要がある。皆が諦めて、妥協するのではなく、お互いの意見の違いを認めつつ、お互いが納得できる結論を導き出すことが大切である。その際に、感情的な話し合いよりも、社会学的手法に則ったワークショップ（WS）を通じて合意形成を行っていく方が効率的である。

鵜的ワークショップ（以下、鵜的WS）というグループワークは社会学的手法を取り入れているため、話し合いにはルールが存在する。そのルールは、(1)ワークショップ中は個人的な、あるいは組織的な問題にこだわらない。(2)すべてのアイデアが有効である。(3)全員が参加する。というものである。ワークショップには様々な立場（漁協の人、行政担当者、野鳥の会など）の人が参加することが想定される。ワークショップを成功に導くには、その人の所属する組織や個人的問題は忘れ、すべての人が対等な参加者として扱うものとする。話し合いの途中で、「そんなことはできるはずない・・・。」等のネガティブな意見を出すことは禁止とする。すべての意見に対し、ポジティブに取り扱うこと。また、特定の人の意見だけが通ることが無いよう、必ず全員が話し合いに参加することを前提とする。

鵜的WSは、まず、話し合いの目的、目標、基本ルールを確認する。その後、WSの進行役、書記、タイムキーパーの役割を決めてもらう。その後、参加者の緊張をほぐすため、自己紹介とともに、このWSで達成したいことについて1～2分で紹介してもらう。次に、カワウ対策に必要な情報をまとめた地図作りをみんなで行う。具体的には、季節ごとの県内のねぐら・コロニーの位置、被害のある漁協の位置、被害のある魚種などを書き入れていく。つぎに、時間を決めて、地図から読み取れるカワウ被害に関する課題について、付箋を用いて書きだす。その後、各自が書いた付箋を発表しつつ、その内容をジャンルごとにまとめていく。最後に、民主的な手法を用いて、重要課題を3～4つに絞り込む。

その後、これらの重要課題を解決するために、必要な対策を考えていく。具体的には、誰がいつどのような予算で実施するか、すぐにできる対策か、それとも、長い時間をかけて取り組んでいく対策課を見極めつつ意見を出してもらう。特に、カワウの対策で重要な、個体群管理、被害防除、生息地管理の3つの観点から、様々な対策について案を出してもらう。最後に、出てきた対策案の中から最も効果が高い対策を選び、優先順位をつけていく。

鵜的WSはあくまでも今後のカワウ対策の道筋を考える話し合いである。この後、ここで決まった対策を実践して初めて被害対策に効果がでる。毎年実施した対策の効果を検証するデータをしっかりととりながら、関係者が対策の成功と失敗の情報を共有しつつ、鵜的フェーズ6を目指して、毎年カワウ対策の改善を行っていくことが重要である。